



Title	スウェーデンのスロイド運動における市民参加
Author(s)	池山, 加奈子
Citation	a+a 美学研究. 2024, 15, p. 46-63
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/103386">https://doi.org/10.18910/103386</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## スウェーデンのスロイド運動における市民参加

スロイドとは何か

スロイド運動の萌芽

三つの団体とスロイド運動の広がり

スロイドとデザインの融合

ローカルの芸術

社会をつくる主体性



図1 | スロイド一例  
(筆者私物)

二〇二二年、スウェーデンの非営利デザイン協会、スヴェンスク・フォルム (Svensk Form) は、報告書『開発力としてのデザイン―持続可能性を見据えた社会変革のための理論と実践に関する方法の研究<sup>『1』</sup>』を発表した。これは文化庁の委託事業であり、スウェーデン工業デザイン財団 (Güfelsen Svensk Industridesign, SVID) と協働で行われたものである。ここでは、デザインが、人々の暮らし、企業の競争、公共サービス、そしてとりわけ気候変動への負荷削減などに寄与し、持続可能な社会に向けた開発力を持つものだと記されている<sup>『2』</sup>。

スヴェンスク・フォルムは、世界で最古のデザイン協会といわれている。設立は一八四五年。現在は、ひろくデザインや建築の振興活動を行っている。先述の報告書の例のように、近年は、持続可能な社会への変革を見据えたデザインについての発信も積極的に行なっている<sup>『3』</sup>。

ところで、その歴史の大半においてスヴェンスク・フォルムは、「スウェーデン・スロイド協会 (Svenska Slöjdörningen)」という名であった<sup>『4』</sup>。ここでいう「スロイド (slöjd)」とは、『スウェーデン語辞典』(二〇二一年度版)によると「手で作る作品、およびその仕事」とされている<sup>『5』</sup>。狭義には木材を用いたものを指すが、木材以外にも、金属・毛・リネンなど、身近な素材を用いてつくられる品々をいう言葉である。「図1」実際にそれは、農業の合間に家庭内での使用や販売のためにつくられてきた日用品であった。スヴェンスク・フォルムと呼ばれている団体は、もともと手仕事の振興をその目的としていたのである。

一九世紀から二〇世紀にかけてのスウェーデンでは、他の国々と同様、

伝統的な手仕事を復興しようとする近代工芸運動と、合理的な工業デザインを推し進めようとする近代デザイン運動が起こった。スウェーデン・スロイド協会はその双方に大きく関わりながら、同国のデザインの歴史を牽引してきた。特筆すべきことに、そうしたデザインをめぐる運動が巻き起こっていたときはまさに、スウェーデン人が、社会福祉を整え、民主的な国家を構築していった時代とも重なる。いずれも人々が連帯し、組織的に運動を起こしていくことで実現されてきた。

本稿では、スウェーデンのデザインの源流としてのスロイドの概念に注目し、その意味の変遷をとらえる。そしてそのうえで、スウェーデンの近代工芸運動としての「スロイド運動」の意義を市民参加の観点から考察する。一般的には、スウェーデンで一八七〇年代以降に最盛期を迎える手仕事を保存・振興する運動は「ヘムスロイド運動」ないしは「ヘムスロイド復興運動」と呼ばれる。本稿はそれを含めながらも、スウェーデン・スロイド協会のようにこれ以前に始まりのちにデザインと接近していく過程も含めたい。よって、一九世紀中期から始まるスロイドの価値を見出す運動を、ひろく「スロイド運動」と呼ぶこととする。さらに、本稿では、市民参加という語について、必ずしも政治的な意味合いだけでなく、購買といった日常的な消費活動を含むものとする。

### スロイドとは何か

スロイドとは、「手で作る作品、およびその仕事」を指すが、その製法と素材によって大きく三つに分類されてきた。起源は明らかでないが、一九七八年に出された国による調査報告書では、その分類が示されている。たとえば、糸つむぎ、織物、刺繍などの軽くて柔らかい素材を用いる手仕事は、かつては女性の領分とされ「女性のスロイド」と呼ばれた。白樺や木工、金属などの硬くて重い素材を用いる手仕事は、かつては男性の領分とされ、「男性のスロイド」と呼ばれた。しかし、徐々にその呼び方が適さなくなり、それぞれ単に「柔らかいスロイド」と「硬いスロイド」と区別されるようになった。また、ラップランド地方に住むサミの人々のスロイドはその両方の要素を持



図2 | サミスロイドのプレスレット(革地に錫の文様)  
撮影: Eriksson, Per ©Dalarnas museum

つものとき、それ、「サミスロイド」図2として独立したカテゴリを持っている<sup>[6]</sup>。

現代のスウェーデンにおいて、スロイドは主に二つの意味で用いられる。その一つは、趣味としてのヘムスロイド (Hemsjöd) 、もう一つは学校科目のスロイド (skolasjöd もしくは sjöd) である。ヘムスロイドの「ヘム」とは「家庭」を意味し、文字通り家庭内で行われるスロイドをさす。厳密に言えばスロイドの一部がヘムスロイドといえることができる。一方で、その生産様式においてスロイドはほとんど家庭と紐づいたものであったことから、スロイドとヘムスロイドはほぼ同義と解釈でき、実際あまり区別されず使用されることも多い。

学校科目のスロイドは、スウェーデン国民全員が学ぶ必須科目である。基礎学校では一年生から九年生 (日本の教育システムの小学一年生から中学三年生に該当する) にて、主に木工スロイド、金工スロイド、繊維スロイド、および、その他の素材を用いた手仕事について学習する<sup>[7]</sup>。

現代のスウェーデン人の生活にとって、スロイドは身近な存在であると言える。スウェーデン文化政策分析庁 (Myndigheten för Kulturanalys) による二〇二二年の調査では、約四〇パーセントの国民がヘムスロイドに興味があると回答し、また約半分の国民が一年に一度以上、ヘムスロイドに取り組んだと回答した<sup>[8]</sup>。

とはいえ、スロイドは非常に曖昧な概念でもある。「スロイド」とハントバルク<sup>[9]</sup>は広い現象である。ヘムスロイドはプロからアマチュアまで様々なレベルで、国中で行われる。ヘムスロイドの意味は時代を経て

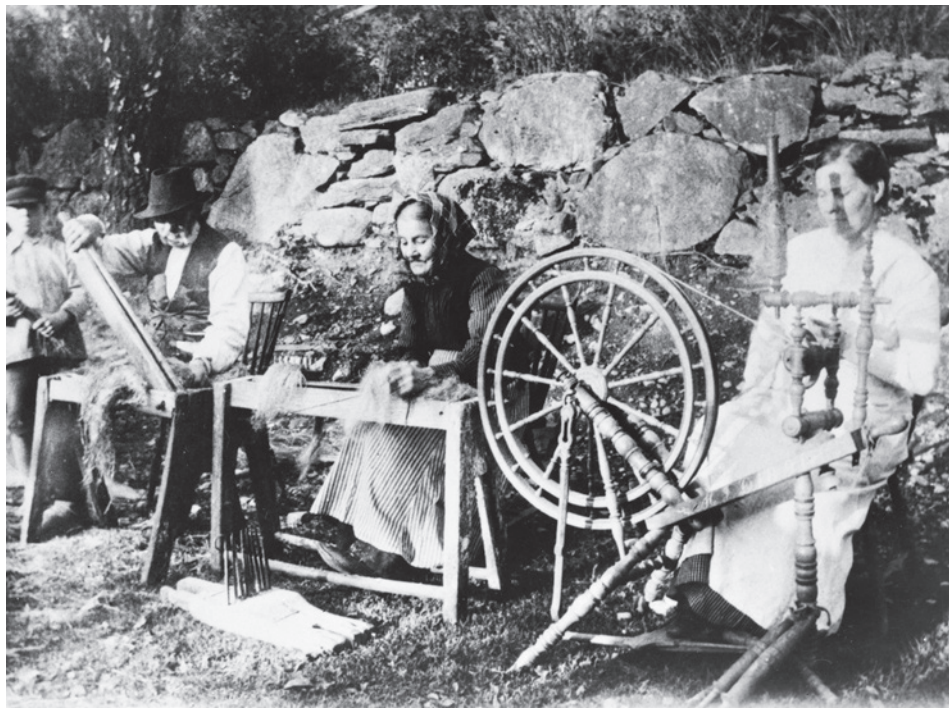


図3 | 農村部でのヘムスロイドの風景

こうした背景のもとでスロイド運動が起こった。そこには、生活にかかわる動機と、芸術にかかわる動機が複雑に絡み合っている。前者については、農家の副業としての側面があった。ヘムスロイドの販売は、徐々に、都市で生み出される大量生産品に圧迫されるようになっていった。一方で、一八六〇年代から一八七〇年代にかけてスウェーデンを大飢饉が襲い、農家の収穫収入が減少した。それを補うため、副業としてのヘムスロイドの可能性に再び注目が集まり、ヘムスロイドによって農家の収入源の拡大を目指す動きが生まれた。各地に組織されていた農村振興協会 (nustånds sällskapet) でヘムスロイドの技術指導や展示会などの活動が行われるようになった<sup>14)</sup>。それがスロイド運動の土壌を形成したと言える。

スロイド運動はまた民衆の芸術運動という側面もあった。ナショナル・ロマンティシズムの高まりと相まって、単一的な大量生産品に抗い、簡素で誠実な農民文化と生活品に美を見出そうとする動きが生まれた<sup>15)</sup>。人々は、流れ作業的で単一的な工業生産品が普及することによって、伝統的な手仕事の美が失われるかもしれないと危惧する。そこで、民俗学者による衣服や建築、日用品を含めた農村部の暮らしの保存・収集活動が行われるようになった。特に著名なのが、アルトゥール・ハセリウ

変わってきている。含まれる対象が広くなってきており、様々な内容が意味に加えられてきている。今日では多くの人が、ヘムスロイドとは単に自ら生み出すことである、と述べている<sup>16)</sup>。このように、「手で作る」ことに加えて、「自らつくる」という側面もスロイドの概念の一部をなすように考察される。実際、スウェーデンで長い歴史を持つ雑誌『ヘムスロイド (Hemslöjd)』では、古い家屋の修繕など、日本でいうDIYやセルフリノベーションのような記事も多く紹介されている<sup>17)</sup>。

スロイドは元来、農村部で家庭用、販売用で行われた手仕事であった。それらはやがて、スロイドそれ自体としての発展、もしくはデザインとしての発展に分岐した。そのきっかけとなったのが、今回の主題となるスロイド運動である。以下では、スロイド運動について取り上げ、その流れを概観する。

### スロイド運動の萌芽

家庭用、および販売用のスロイドの歴史は非常に古い。販売用のスロイドは、農業の副業として、かなり早いうちから田舎の農民の生業を補うものになった。<sup>18)</sup> 農業生産量が少ない地域では、農産物よりもスロイドが重要な収入源であることもあった。それぞれの地域で、異なる素材、特徴を持つスロイドが生産された。それは各々が特定のスロイド分野でのエキスパートとなることを意味し、地域間で生産品を交換することによって生活を補い合うこともできた。そのようにして小さな経済圏が構築されたのである<sup>19)</sup>。

中世の時代、都市と田舎の生業が区別されるようになっていった。田舎は食料や原材料を提供し、都市は加工を担当した。それは、ヘムスロイドとハントバルクの間で最初の境界線が引かれることに繋がった。その後の数百年のうち、都市では、分業の原則が作られていった<sup>20)</sup>。

一九世紀の後半にかけて、スウェーデンにも徐々に産業革命の波がやってきた。農業従事者たちは、都市や小さな街に出ていき、農村で発展していた販売用や家庭用のヘムスロイドは、徐々に都市部に進出していく。





図5 | リリー・シッケルマン

レンは、この学校の運営とスウェーデンのスロイドの質の向上を目指して、前述のスウェーデン・スロイド協会を設立した。同協会はその後、徐々にデザインの歴史を牽引していくが、その経緯については次章で述べる。

一九世紀後半、マンデルグレンの予想通り、工業化による安価な製品の普及と農村部での労働形態の変化により、一時ヘムスロイドは衰退することになる。そのような中で設立されたのが、手工芸交友会である。一八七四年、ソフィ・アドレシュパッレ (Sophie Adlersparre, 1823-1895) の主導で設立された。「手仕事 (handarbete)」の「友達 (vänner)」を意味する当団体は、スロイドの中でも特にテキスタイルに特化し、その名の通り、手仕事を愛する女性同士が連帯した組織である。ヘムスロイドは元来家庭内の仕事に深く結びついていたことから、担い手の多くは女性だった。アドレシュパッレは、ヘムスロイドの保存を通じ、農村部の伝統的な美を守ると同時に、女性たちの経済的な自立のきっかけとすることを目指したのである<sup>[18]</sup>。彼女らは各地で継承されてきた高品質のテキスタイルの図版や技術を集め、それをインスピレーションの種とらえた。そして、より芸術性の高い製品をつくることやそのための教育を行うことを目指した<sup>[20]</sup>。その過程で、当団体は、画期的な技法や芸術性の高い作品を生み出してきた。現在も、ストックホルムのユールゴーデン島に本部を構え、学校、アトリエ、ギャラリーの運営を通して、スウェーデンのテキスタイル芸術の最前線を切り拓く存在となっている<sup>[21]</sup>。

また、一八九九年、テキスタイル作家のリリー・シッケルマン (Lilli Zickelman, 1858-1949)<sup>[図5]</sup>主導のもと、スウェーデン・ヘムスロイド協会 (Föreningen för Svensk Henslöd) が設立された。そして、ストックホルムに「スヴェンスク・ヘムスロイド」という店舗が開かれた。これを手本に全国に同様の組織が生まれ、一九一二年までには、全国各地に二四ものヘムスロイド協会が設立された（一九一五年までにはさらに八団体が設立）。彼らの活動目的は、ヘムスロイドの普及、金銭・知識面での支援、ヘムスロイドの原材料や図

図4 | 北方民俗博物館  
撮影：Segemark, Peter  
©Nordiska Museet

ス (Arthur Hazelius, 1833-1901) である。彼は、全国から生活道具や民族衣装を集め、一八八〇年にストックホルムに北方民俗博物館を設立して展示した。<sup>[図4]</sup>また、一八九〇年には世界最古の野外博物館であるスカンセン野外博物館を設立し、工業化以前の農村部の街並みを再現し、当時の人々の暮らしを伝えた。ちなみに、のちに日本で民藝運動を展開した柳宗悦らは、日本民藝館設立時にこれらの博物館を視察に訪れ、参考にしたという<sup>[16]</sup>。

### 三つの団体とスロイド運動の広がり

スロイド運動の歴史は、スロイドに関する諸団体 (föreningar)<sup>[17]</sup>の発展の歴史と言いつ換えることができるだろう。さまざまな団体が組織され、人々が連帯することによって目的を達成してきた。スロイド運動が起こった時代は、まさに労働運動や女性運動などが起こり、民主国家を人々の手で作っていった時代とも重なり、スロイド運動もそのような機運の中で展開されたのである。以下ではそれぞれに特色の異なる三つの団体、スウェーデン・スロイド協会、手工芸交友会 (Handarbets Vänner)、スウェーデン・ヘムスロイド協会 (Föreningen för Svensk Henslöd) を取り上げながら、スロイド運動の展開について考察する。

産業革命の到来の中、いち早く団体を立ち上げたのが、芸術家・民俗学者のニルス・モンソン・マンデルグレン (Nils Månsson Mandelgren, 1813-1899) である。彼は、スキルが未熟な職人による低品質な大量生産品に対して危惧を覚え、一八四四年に「職人のための日曜製図学校 (Söndagsritskola för Hantverkare)」を設立した。(同校は、のちに数回の改名を経て<sup>[18]</sup>、スウェーデン国立美術工芸大学、通称コンストファック (Konstfack) となり、数多くの著名なデザイナーやアーティストを輩出することになる。) 翌一八四五年、マンデルグ



図6 | エレン・ケイ

スロイドがデザインに融合していく経緯について触れておく。一つの指針を示した人物に教育思想家・社会批評家・女性運動家のエレン・ケイ (Ellen Key, 1849-1926) [図6] がある。一九世紀後半、都市の労働者階級は、狭く薄暗い部屋に大家族が暮らすような劣悪な暮らしを強いられていた。ケイは、そのような状況に心を痛め、新しい時代の新

案の提供、ヘムスロイドの品々の販売、そしてスロイド教育の推進だった。また、マルメヒュースのヘムスロイド協会のイニシアティブにより、同じ一九一二年、スウェーデン・ヘムスロイド協会連合 (Svenska Hemsloidsförningarnas Riksförbund) が組織された。各地の協会がその傘下に入ることで、横のつながりが強化されていく<sup>[22]</sup>。現在、全国各地に、それぞれの地域のヘムスロイドを発信・販売するヘムスロイド協会がある。協会連合には、一万四〇〇〇人の会員と、九〇ものヘムスロイド団体が所属しており、全国的なネットワークになっている。実は、先述の雑誌『ヘムスロイド』は、スウェーデン・ヘムスロイド協会連合が運営している。他にも、市民が気軽に参加できるイベントの開催やヘムスロイドの収集品のデジタルアーカイブの提供などを行なっている<sup>[23]</sup>。スウェーデン国民にとって、当団体は身近な存在であると言える。

ヘムスロイド運動を通して、スウェーデン各地にスロイド学校が作られたことも注目すべきであろう。特に有名なものが、オットー・サロモン (Otto Salomon, 1849-1907) が設立したネース少年スロイド学校 (Närs Slöjdskola för Gossar) であり、ここでのサロモンのスロイドの教育的実践はその後スロイド教育に大きく影響を及ぼした<sup>[24]</sup>。後にスロイドは義務教科目になり、以来現在まで続いている。

概観すると、スロイドの運動の三つの団体は、それぞれ別の役割を担うようになったと考えられる。スウェーデン・スロイド協会は、デザインの歴史を牽引した。手工芸交友会は、より芸術性の高いスロイドの発展に寄与した。スウェーデン・ヘムスロイド協会は、広範な人々を対象にヘムスロイドの普及を担った。

### スロイドとデザインの融合





図7 | カール・ラーション《Blomsterfönstret》1894  
 (『Ett Hem』より) ©Nationalmuseum

しい暮らしを考えていく中、昔ながらの農村部の素朴な生活にこそ美があると考えようになる。彼女は一八八九年に出版したブックレット『すべての人に美を』の中で、労働者階級を対象にした美しい環境作りの提案を行った<sup>[25]</sup>。ケイは美の最たるものとして「自然界にあるもの」を挙げた。自然界のすべてのものがそうであるように、ものはシンブルで表現力豊かな方法で、目的を達成しなければならなかった。つまり、すべてのものは目的に対応していなければならぬ。たとえば、座り心地の悪い椅子、安定しないテーブル、窮屈なベッドはそれだけで美しくないと述べた。そして、目的にそぐわず不必要で過剰な装飾を批判した<sup>[26]</sup>。彼女は、近代デザイン的な合理的な思想を先取りしていたことが窺える。

書籍の中で、彼女は新しい時代の住まいの参考として、ナショナル・ロマンティズムを代表する画家、カール・ラーション (Carl Larsson, 1853-1919) の家を挙げている。ラーションと妻のカーリン・ラーション (Karin Larsson, 1859-1928) は、フランスでの活動を経て帰国後、家族でダーラナ地方のサンドボーンに移り、古い農家を自分たちで改装して住まいをつくりあげた。そして、その家で過ごす家族の日常を、絵本『ある住まい (Ett Hem)』に描いた。彼らの住まいは、軽さ、明るさ、簡素さを特徴に持ち、色調が統一されたシンブルな家具の中に、装飾的なヘムスロイドが融合している。<sup>[27]</sup> ケイは、彼らの住まいに、近代性の中に伝統的な手仕事で融合した新しいライフスタイルを見たのである<sup>[28]</sup>。

一方で、彼女は誰しもが同じスタイルを持つべきだと述べたわけではない。むしろ、それぞれの住まい方は、(画一化されたものではなく) 個々のニーズに応じて異なるものでなければならぬと述べた。大切なことは、個々が自分のスタイルを持ち、調和のとれた空間を構築することだと考えたのである<sup>[29]</sup>。

ただ、当時の労働者階級の過ごす劣悪な環境下では、各自のスタイルを確立することは難しいと考えた。そこで彼女は人々が美しい暮らしを実現するために、二つの提案をしている。その一つは、製造業者と芸術家の協働によって、芸術性の高い大量生産品を作ることであり、もう一つは、国民一人一人の趣味の向上を行うことである<sup>[30]</sup>。

ケイの主張は、スウェーデン・スロイド協会の動きとも共鳴していった。スウェーデン・スロイド協会は、一八八〇年代以降、他のスロイド関連団体の活動の高まりから、自身は、手仕事の保護よりも、産業と合流していく道を辿るようになった。そして、国民の趣味の向上を目的とするようになり、展覧会や常設の博物館を通じて、啓蒙活動を行った<sup>[31]</sup>。また、一九一〇年前後からはバウハウスに影響を受けた合理的・普遍的な工業生産の思想と迎合していく。このとき大きな影響力を持ったのが、一九一五年からスロイド協会に参画し、のちに会長を務めた美術史家、グレゴール・パウルソン (Gregor Paulson, 1869-1977) である。若い頃にドイツに留学した彼は、美しく良質な品を全ての人に提供するという民主主義的な理念に影響を受けていた。そして一九一九年『より美しい日用品 (Vackrare Varusvara)』という冊子を出版した。ここには、なぜ新しいデザインが求められるのか、どのようなデザインが望ましいのか、デザイナーや製造業者、小売業者に求められる意識改革などについて述べられている<sup>[32]</sup>。すでにスウェーデン・スロイド協会は、ケイの言ったように芸術家と企業の仲介などを行っていた<sup>[33]</sup>が、その動きがより推し進められた。スウェーデン・スロイド協会の活動は、一九三〇年代以降に政権を獲得した社会民主党とも共鳴しながら発展を遂げた。そうした中で、スウェーデンのデザインは、伝統的なヘムスロイドから引き継いだ素朴なあたかみと、合理的な機能性が融合するデザインとして結実し、国際的な評価を得ていくようになった<sup>[34]</sup>。一九五〇年代以降、スウェーデン・スロイド協会は徐々に啓蒙活動を終え、社会に助言を与える一機関として、より自由で多様なデザイン活動を促す方向に転換する<sup>[35]</sup>。そして一九七〇年代にはスヴェンスク・フォルムと改称し、現在では「よいデザインを通じた持続可能な社会」というビジョンのもと、デザイン分野の発展を推進する団体となっている。二八〇〇人の会員を有し、冒頭に述べたデザイン賞「Design S」の運営、国の委託調査事業、国内外の展示会出展、デザインアーカイブの運営などを行っている<sup>[36]</sup>。

ケイの主張やその後のスウェーデン・スロイド協会の活動には、人々がものを作り出す立場から消費する立場になったときに、どのように主体性を取り戻していくのかという問いを孕むと考えられる。

## ローカルの芸術

一連のスロイド運動において見出されたスロイドの美や芸術性とはどのようなものだったのだろうか。

スウェーデン・ヘムスロイド協会を立ち上げたリリ・シッケルマンは、スロイドの美しさを「地方色」と名付け、風土に根ざして個性豊かに発達してきたものとして讃えた。特に、テキスタイル分野においては、非常に色彩豊かで装飾的なものが多く見られる。そのような「地方色」の美について、たとえば舞台ディレクターで作家のカール・ラグナル・イーロウ (Karl Ragnar Gierow, 1904-1982) は、スコーネ地方のスロイドを題材に一九三八年、次のように記している。「スコーネ地方の物語は、二三もの地誌によって語られるべきだ。しかし、この地のヘムスロイドを見れば、たった一度で、私たちはその物語を知ることができる。[…:] 湿原と泥地の間のコミュニケーション、砂丘から片麻岩の尾根やヘザーの林へのグラデーション、田んぼと畑のコントラストは、(テキスタイル作品の) 色彩構成、技術、そして装飾によってつくられた多種多様な花々に見られる変化ほど、明確で目を引くものではない。そしてその花々は、この地方にあるすべての織り機の周りで花咲くものである。」<sup>[36]</sup>

一方で、ヘムスロイドはいささか規律的なものでもあった。そもそも生業であったその活動においては、慎ましかに制作することが美德とされた。それを象徴するようにヘムスロイドについて「虚栄心の強いものは痛い目に合う」という言葉が残っている。誠実さは、ヘムスロイドの美の一つの要素であると言える。前述のハンドアルベータツ・ベンネルの設立者であるソフィ・アルデシユパツレは、一八八〇年、ヘムスロイドの持つ性格について次のように述べている。

- 1 ときに乱用され失われうる時間を、大事に使うこと。
- 2 健やかで美しい労働を楽しむ習慣であること。

- 3 家庭の維持と装飾のために行う共同作業を通して、家族がともに生きる喜びが増幅すること。
- 4 洗練された美の感覚を伴うこと。
- 5 市場で販売される商品に関して、何がよきもので悪いものか、何が美しいものか洞察されること (そうでなければ低水準の商品を購入したり、浪費したりしてしまうだろう)。
- 6 そして最後に、裕福でない女性が、家のことを放棄することなく、収入を得る機会となること<sup>[37]</sup>。

女性の家庭内での仕事はかなり忙しかった。家畜の世話や農作業に加え、家事、子どもたちや年配者の世話などをこなさなければならぬ。そうした忙しいスケジュールの一部に、もしくは片手間という位置にヘムスロイドは存在した。それは仕事でありながらも、規律の隙間を縫ってやってくる、空想的な遊びでもあった。作家・詩人のカール・エリック・フォシュルンド (Karl-Erik Forsslund, 1872-1941) は、一九二八年の作品『泉から海へ流れるダール川とともに (Med Dalälven från källorna till havet)』<sup>[38]</sup>に、スロイドの創作活動について下記のように表している。「その境界 (装飾の必要性に対する感情) の範囲内で、作り手のファンタジーが、なんでもない日常にあるものを用いてモチーフをつくる。地に生える植物、衣服や住まいの中にある小さなもの、川の水面を滑るボートが、模様という形の詩となり遊ぶ。今日でも (レースを編むことに対して) 『レースの詩を読む』という表現が残っている。」<sup>[38]</sup> [図8]

## 社会をつくる主体性

スロイドは、一般の人々が、日常の規範の中でそれぞれの風土に根ざして生み出してきた芸術である。それは元来、娯楽的な活動ではなく、生き延びていくための生業であり、ある



図8 | 帽子に施されたレース  
©Länsmuseet Gävleborg



種の勤勉さを伴う規律的な活動であった。そのような状況下で、それでも周りの環境から空想を膨らませながら模様として紡いできた「詩」であった。そしてそれは、労働や家族で過ごす時間の喜びでもあり、美的な感性を養うものでもあった。

ここに、スロイドの多義的なローカル性を見ることができるとは、それは都市に対する地方、職人に対する非職人、本業に対する副業、画一に対する多様、そして、社会的な立場における、中央に対する周縁である。

スウェーデンのスロイド運動とは、「ローカル」に位置付けられていた芸術としてのスロイドの価値を見出す動きであった。それとともに、そこに関わる人たちの潜在的な主体性を確認し、彼らが社会に参加していくプロセスでもあったと言える。主体性とは生産者側のみが持つのではなく、消費者側も持つものである。また、積極的に行動を起こすような動的な参加に対し、日常生活の中で密かに発揮される静的な参加もある。スウェーデン市民は、近代社会を確立していく過程で、さまざまな参加の方法で、誰しもが客体化されることなく自らの手で周辺環境を、ひいては社会を良くしていけるという意識を獲得していったのではないだろうか。

今日、持続可能な社会に向けて、デザインに期待される役割はますます大きくなっている。社会課題解決や社会変革のためのデザインを考えると、我々は規律やシステムを問い直し、社会全体を見渡し、課題を俯瞰的にとらえる態度が必要となる。その一方で、目線を近くに寄せると、規律やシステムの内部で行われるローカルな技芸の中にこそ、社会をつくる主体性を見つけることもできるだろう。スウェーデンのスロイド運動に、その手がかりを見出すことができるのではないだろうか。

池山加奈子（いけやま・かなこ）

一九九一年生まれ。大阪大学大学院人文科学研究科博士前期課程。クリエイティブ・ディレクター。専門はデザイン、スウェーデンのスロイド（手仕事）。

## 註

- <sup>\*1</sup> Svensk Form and SVID, *En Studie om Sätt att Tänka och Arbeta För Samhällets Transformation i Hållbar Rikning* (Svensk Form, 2022).
- <sup>\*2</sup> *Ibid.*, 8.
- <sup>\*3</sup> スウェーデン・スロイド協会が運営するデザイン賞「Design S」は「11のカテゴリが設けられているが、2013年に「システム転換のためのデザイン」Design for systemic transformation」などのカテゴリが加えられた。“Om Design S,” Design S, accessed December 18, 2023, <https://design-s.se/en/om-design-s-en/>
- <sup>\*4</sup> 一九七二年、スウェーデン・スロイド協会はスタンスク・フォルムに改名。スタンスク・フォルムの歴史については次を参照。“Historia,” Svensk Form, accessed December 18, 2023, <https://svenskform.se/om-svensk-form/historia/>
- <sup>\*5</sup> Svenska Akademien が提供する Merordboken (Svensk Ordbok) を参照。“slöjd,” svenska.se, accessed December 26, 2023, <https://svenska.se/re/?sok=slöjd&px=1>
- <sup>\*6</sup> SOU 1979 : 77, *Hemslöjd, Kulturarbete, Produktion, Sysselsättning*, Industridepartement (Repront AB, 1979) 30–31, Electronic Book.
- <sup>\*7</sup> スロイド辞目について、次を参照。“Kursplan-Slöjd (Grundskolan),” Skolverket, accessed December 18, 2023, <https://www.skolverket.se/undervisning/grundskolan/laroplan-och-kursplaner-for-grundskolan/laroplan-1gr22-for-grundskolan-samt-for-forskoeklassen-och-fritidshemmet>
- <sup>\*8</sup> Myndigheten för Kulturanalys, *Slöjd och Hantverk 2021 Fördjupande Rapport om Kultur* (Myndigheten för Kulturanalys, 2022).
- <sup>\*9</sup> ハンター・ベルク (hantverk) とはスロイドと同じく「手仕事」を指すが、ホームスロイドより職人的な技術を要求し、より実用的なものに利用される。
- <sup>\*10</sup> Myndigheten för Kulturanalys, *Slöjd och Hantverk 2021 Fördjupande Rapport om Kultur* (Myndigheten för Kulturanalys, 2022), 6. 原典は以上。Anneli Palmasköld, *Begeppet hemslöjd* (Hemslöjdens Förlag, 2012).
- <sup>\*11</sup> Hemslöjd Media AB, *Hemslöjd* (Trydells Tryckeri, 2023).
- <sup>\*12</sup> SOU 1979: 77, *Hemslöjd, Kulturarbete, Produktion, Sysselsättning*, 33.
- <sup>\*13</sup> *Ibid.*, 33.
- <sup>\*14</sup> *Ibid.*, 34.
- <sup>\*15</sup> ナショナル・ロマンティズムについて次を参照。“National Romantiken,” SO-Rummet, accessed December 18, 2023, <https://www.so-rummet.se/fakta-artiklar/nationalromantiken>
- <sup>\*16</sup> 渡部千春「北欧デザイン」の考え方「プロダクト・建築・テキスタイル名作をつくった人と時代とアイデンティティ」

〔誠文堂新光社、二〇二二年〕一四三頁。

\*17 Foreningen とは、市民で構成される活動主体のことをさす北欧独特の概念で、趣味、スポーツ、文化活動など特定の目的を持った市民同士が自発的に立ち上げるものである。

\*18 同校の変遷は、次の通り。一八四四年、職人のための日曜製図学校 (Söndagsriska för Hantverkare)。一八四五年、スウェーデン・スロイド協会学校 (Svensk Slöjdföreningens Skola) に改名。一八五九年、国営になる。一八七九年、技術学校 (Tekniska Skolan) に改名。一九四五年、美術部門学校 (Konstfackskolan) に改名。一九七八年、大学認定。一九九三年、スウェーデン国立美術工芸大学 (Konstfack) に改名。“Historik,” Konstfack, accessed December 18, 2023, <https://www.konstfack.se/sv/On-Konstfack/Detta-ar-Konstfack/Historik/>

\*19 太田美幸『スウェーデン・デザインと福祉国家―住まいと人づくりの文化史―(新評論, 2二〇一八年) 五四―五六頁。例えば、ハンドアルバーテッツ・ヴェンネルは、地方のテキスタイル作家が収益を得られるシステムを考案した。ストックホルムにある同協会が、スウェーデン各地の女性の熟練職人を探し、彼女らと契約を結んで制作を依頼し、完成した商品を販売して製作者に利益を届けるというもの。製作者側にはストックホルムで高度な技術を習得する機会が提供され、ハンドアルバーテッツ・ヴェンネル側は、各地の古い技法やデザインの情報を収集することができた。

太田、前掲書、五四頁。

\*20 “On Oss,” Handarbeters Vänner, accessed December 18, 2023, <https://handarbetersvanner.se/om-oss/>

\*21 SOU 1979: 77, *Hemslöjd, Kulturarbete, Produktion, Sysselet*, 42.

\*22 “Bli Medlem,” Hemslojden, accessed December 19, <https://hemslojden.org/engagera-mig/bli-medlem/>

\*23 横山悦生「オットー・サロモンの初期スロイド教育―ネース・少年スロイド学校における実践の到達点からみたシグネウスの影響」『産業教育学研究』三六巻一号(二〇〇五年) 七三―八〇頁。

\*24 エレン・ケイの背景については以下を参照。太田美幸『スウェーデン・デザインと福祉国家』八〇―九〇頁。

\*25 Key Ellen, *Skönhet för alla - Fyra Uppgifter* (Albarr Bonniers Boktryckeri, 1891/1899), 3-9, Electronic Book.

\*26 *Ibid.*, 8-9.

\*27 *Ibid.*, 3-7.

\*28 太田、前掲書、九二頁。

\*29 同書、一四六頁。

\*30 同書、一六〇頁。

\*31 たとえば、ヴィルヘルム・コーゲ (Wilhelm Kage, 1889-1960) は協会の紹介によって陶磁器メーカー・グスタフスベリ社に採用され、アートディレクターとして多くの人が使いやすい食器のデザインを手がけた。

\*32 Brunström Lasse, *Svensk Design Historia* (Rastor, 2010), 109-115.

\*33 菅靖子「戦後スウェーデンにおけるスタジオ・クラフト運動と文化政策」『文化経済学』一一号(二〇〇一年) 二三頁。

\*34

\*35 “Om Svensk Form,” Design S, accessed December 18, 2023, <https://design-s.se/en/om-design-s-en/>

\*36 Svenska Turistföreningen, *Levande Textil* (Almqvist & Wiksell Tryckeri, 1988), 105.

\*37 *Ibid.*, 116.

\*38 *Ibid.*, 117.